

富岡洋子作 「女の時代」

<前編>「朝シャン騒動」

(効果音) (教室ガヤ)

中村多美子ナレーション ここは青春中学 2 年B組。今ホームルームの時間。わたしは中村多美子。「美しさの多い子」と書いて「多美子」。ウフツ、名前負けしてるなんて言わないでね。女は美しさにあこがれるんだから。と言うのも、実はうちのクラスで今問題になっているのが、「今の男は男らしいか。女は女らしいか」ということ。「いや、女は男らしくなったな」と男子が言えば、「そういう男の子は女らしくなったじゃん」と女子がやり返し、ああたこうだと喧嘩がくがくやっているうち、すっかりこんがらかってきちゃったから大変。事の起こりはこれ！ ちょっと聞いて。3 日前の日曜日――。

(効果音) (始業のチャイム)

関口麻莉子 起立。礼。着席。(イスのガタガタいう音)

西田先生 おはよう。ああ、今日はみんなに紹介したい人がいるんだ。さ、入りなさい。今日から2年B組の仲間だ。自己紹介してくれるか？

宮坂大地 あ、はい。仙台から転校してきた宮坂大地です。よろしく。

(全員) 「エー、転校生？」「大地？ すげえ名前」「ヤダー、鈴木大地みたい」etc.

西田先生 おーい、静かにしろ。ま、初めてのことばかりだろうから、皆、何かと力になってあげてくれ。じゃ席はっと、…ああ、中村、中村の隣が空いてるな？ じゃ、あそこにな。うん。おっ、それじゃ議長の関口、話し合いを進めてくれ。

麻莉子 はい。それでは1学期のクラス委員を決めたいと思います。会長と副会長が1名ずつですね。この間も立候補はなかったので、推薦で決めていいですか？(間)じゃそうします。だれか推薦してください。

女子 はい、会長に関口さんがいいと思います。

(全員) 「はい、会長に藤田さん」「賛成」「鈴木さん」「はい、副会長に永田君」「野崎君」etc.

麻莉子 え～、それでは推薦と多数決の結果、会長はわたし、関口麻莉子、副会長は永田篤志君に決まりました。いいでしょうか？

(全員) (拍手)

麻莉子 はい、それでは…。

大地 (さえぎって)おかしいな、それ。

麻莉子 え？

西口先生 ん？

(全員) 「何？」「だれ？」「どうしたの？」etc.

麻莉子 み、宮坂君。意見あるんですか？
大地 会長って、普通、男がやるもんじゃない。
ナレーション これが問題発言。この「会長は普通、男がやるもん」と言い切った転校生、宮坂君の一言から、問題が起こったのだ。どのクラスもそうなんだけど、女の子のほうが強くてハッキリしてるのに、この宮坂君の発言は、ちょっとした驚きだった。

(全員) (ガヤ)
麻莉子 ちょっと宮坂君。“普通”ってどういう意味よ。
女子 男子が会長でなくちゃいけないって言うの？
多美子 なんだか、女子をバカにしたような言い方じゃない、それ？
(全員) (賛同のガヤ)
(効果音) (教室の戸が開く音)
上月正己 おはよ一っす。
西口先生 なんだ、上月。また遅刻か。お前、最近遅刻が多いな。どうしてだ？
正己 すいません。朝シャンしてて、つい…。
西口先生 朝シャン？ 何だ、それ？
(全員) (笑い)「え～、先生、朝シャン知らないの？」etc.
女子 朝、シャンプーして髪を洗うから“朝シャン”っていうの。常識だよ。
西口先生 朝にシャンプー？ そんなことして遅刻するくらいなら、夜に洗っとけ。
正己 夜も洗ってますよ、僕。
多美子 上月君は清潔なのよね。それくらいのオシャレは男の子だって当然よ。
大地 男のオシャレなんて気持ち悪いな。おれなんか、一日おきにしか洗わないよ。
女子 え～、汚ーい。遅れてるうー。
大地 汚いとはなんだ、汚いとは。
多美子 宮坂君、言っときますけどね。東京の男の子のステータスは石^{せっけん}鱈のにおいなんです！
西口先生 面白い、石^{せっけん}鱈のにおいってのは、普通、女の子に使う季語みたいなもんだぞ。かの石原裕次郎が好きな女の子のタイプ聞かれて、「石^{せっけん}鱈のにおいのする人」って言ったら、日本中の女はわれもわれもと石^{せっけん}鱈でゴシゴシやったもんだ。それを、いくら男が軟弱になったって言ってもなあ。おい、本当か、男子。
男子 うーん。朝シャンはするよなあ。
正己 やっぱ、カッコよくするにはきれいでもなくちゃねえ。普通じゃん。
大地 なっさけねえな。それじゃ男だか女だか分かんないね。
女子 ひどーい、そんな言い方。
男子 おい、宮坂。そりゃないだろ。
多美子 分かってないのは宮坂君のほうよ。
大地 そんなにまでして女の子の機嫌とりたいのかよ。

男子 しょうがねえだろ。やんなきゃ総スカンだもん。お前もそうなるって。

大地 なんだと！

西口先生 おいおいおい！

(効果音) (終業のチャイム)

西口先生 今日はこれまでにしておこう。

ナレーション みんな久しぶりに興奮していた。先生もケンカ腰のみんなにアタフタしちゃって、さっさと帰っちゃった。そんな話を夕食の時、母に聞かせた。

母 そう。今どき珍しいわね、その宮坂大地君って子。確かに女性は強くなったわね。隣の山口さんとこのお嬢さんも、OLでバリバリやっててね。駅前でドリンクをグイッとやるのが日課だって言ってたもの。“ギャルのおじさん化”って言うそうよ。

多美子 へえ～、すごい。お母さん、そんな言葉知ってるんだ。

母 ああ、パート先の若い子たちが言ってたのよ。今は女の時代よ。機会均等、男女平等…。

ナレーション 次の日、学校で。再びホームルームの時間だった。

西口先生 あー、おとといの話だが、先生はどうも解せん。男が石鹼げのにおいってのはどうもな。でだ、今日はもう少し前向きに話し合おう。感情的にならないでな。

女子 え～、そんなの面倒くさい。

麻莉子 勉強にしてください。

西口先生 いや、これは結構、重要だと思うんだ。

多美子 しつこいなあ、先生も。男らしくない。

西口先生 そう、それだ。“男らしい、らしくない”ってどういうことか、お前たちに聞いてみたかったんだ。

(全員) 「え～、そんなの」

西口先生 いや、ちゃんと国語の足しになるように。じゃ、これ配ってくれ。さ、いいか、今配った紙に、100字以内で、男と女の“らしさ”、これが男女それぞれの本質とか本分だとか思うものを、自分なりに書いてみてくれ。いいな？ じゃ、始め。

(全員) (口々にブーブー言う)

ナレーション やがてみんなの紙が集められた。

西口先生 何々？「男の本質は、ずばりエッチ。」うん、なるほど。ああ、「男は堂々とした中にも、優しさを持っているべきだ」か。ふむ。女に対してはどうだ？ ああ、「控えめなほうがいいが、リードしてくれるのも捨てがたい。」なあんだこりゃ？ それと、ああ、これは長いな。「女はもともと男を助ける者として、神様が創つくったんだから、でしゃばったり、男を見下したりするのはおかしい。男は神様から、治めるように言われているいろいろな責任を果たす心構えや、強さが必要だ。」ほう、すごいなこりゃ。

(全員) 「だあれ、そんなこと書いたの?」「男女の差別してるわよね。」「ほんとにだれ?」

大地 おれだよ。

(全員) 「へえ～、またあいつか」「やっぱり宮坂君」

大地 おれは差別をしているわけじゃないんだ。これはさあ、男と女の役割の違いなんだよ。能力的に女子が男子より劣ってるってわけじゃないんだ。聖書に書いてあんだよ。

(効果音) (教室の戸が開く音)

正己 スンませーん。

西口先生 上月! またお前遅刻か! ん? なんだ、どうしたんだ? 服がぬれてるぞ。

正己 校庭で貧血起こしちゃって。そしたら泥水に倒れ込んだじゃって。

西口先生 貧血?(ため息)今は男も貧血になる時代か。

多美子 上月君。早く脱がないと風邪ひくよ。わたし、洗ったげるから。

正己 あ、どうも。

ナレーション 上月君にちょっぴり気が合ったこともあって、わたしは彼の上着を持って洗面所に行った。

多美子 あーらあら、ハデに汚しちゃったなあ。こんなに泥が付いちゃって。早く落とさなくちゃ。

大地 ダメだよ、水で洗っちゃ。

多美子 え?

ナレーション なんと、後ろから来たのは、あの憎ったらしい宮坂君だった。

多美子 何よ。何の用?

大地 泥の付いた服の洗いが気になったんで来てみたら、案の定だ。

多美子 え?

大地 貸して。泥はね、乾いてからブラシで落として、それから洗うといいんだよ。

多美子 え? ああ、そう。

多美子モノローグ なんだなんだ、こいつ。女のわたしの知らないことを知ってるじゃん。

大地 おれんち、みんなクリスチャンなんだけど、ばあちゃんも母ちゃんも家のことよくやるよ。それを見て育ったから、洗濯なんか割とうるさいんだ、男のくせにね。

多美子 あ、クリスチャン? へえ、そうなんだ。わたしなんか、泥の落とし方なんて知らなかったよ。恥ずかしい、女のくせに。

大地 そんなことないよ。“恥ずかしい”って思うのは、女らしさを持つてる証拠じゃないの?

多美子 女らしい? そういえば、自分が女だって意識、あんまりしてなかったなあ。宮坂君が挑戦してくるまでは。アハッ。

大地 いやあ、挑戦なんてつもりなかったんだけど。ただおれは聖書で、神様が言って

る本当の人間の在り方をみんなに知ってもらいたかったんだ。見ると、なんかあんまり男が女みたいで…。

多美子 (続けて)“女が男みたいだから”？ほんとだね。宮坂君の言う、“神様が男と女に与えた役割”ってどんなの？

大地 うん。さっきも言ったけど、人間としては平等だけど、神様が創られたその秩序、つまり男のアダムが創られて、次に、「人は独りでいるのはよくない」って、その助け手として女のエバが、あ、普通イブって言ってるかな、そのイブが創られただろ。人格的にどっちが偉かって優劣の差はないけど、役割は違うんだよな。男は赤ちゃんを産まないし、肉体労働は女の人に向かないよね。お互いに助け合って生きるように創られたんだ。それどころか、男は助けを必要とするんだから、助けてあげる女の方のほうの方が本当はしっかりしてるのかもしれない。でもそれを鼻にかけてあからさまに男と張り合おうとしたり、何でもしゃしゃり出る女は嫌いだな。

ナレーション 宮坂君、手キビしい。でも彼の言う聖書の中の男女の姿が、なんとなく分かった。女は男の助け手あ。たとえ男のど真ん中にいても、女には女として活躍する場があるのかもしれないな。わたしはちょっぴり悟っちゃった気分で、なんとなく頭の中のモヤモヤが吹っ切れた。ところがそのわたしをまたも大混乱に引き落とすような出来事が、今度は我が家に持ち上がったのだ！

<後編>「女を強くしたのはだれ？」

ナレーション わたし、中村多美子。青春中学 2 年生。“美しさの多い子”と書いて“多美子”。クラスに、仙台からの転校生が来て、我がクラスの女性上位に挑戦してきた。彼の名は宮坂大地。ひょんなことから彼の優しさに触れて、彼がクリスチャンであることと、聖書が示す男性・女性の在り方、役割について教えてもらった。神様は、最初にまず男を創られて、それから「人が独りでいるのはよくない」と思われて、男の助け手として女を創られたんだって。男性は女性の助けを必要としているし、女性もその創られた目的・役割を果たすには、何でも男性のようになろうとするんじゃないで、あくまでも助ける者としての立場で能力を発揮することが大切なんだって。すごいよ、宮坂君。同じ中 2 で一見カッペふうなのに、先生も知らないようなこと教えてくれるんだもん。わたしはその夜、なんとなくホワツとした気分ですぐに寝た。ところが夜中に、わたしは両親の話し声で目を覚ました。

母 あなたはいつもそうだわ。わたしにばかり押し付けて！

父 自分の役割も果たさず何言ってるんだ！

母 あなたはどうなの？ あなたこそ、家のことなんかちっとも構わないじゃない！

父 うるさい！

ナレーション 一体何があったのか？ わたしは不安な気持ちを抑えて階段を下りていった。
父 お前は一体何が不満だって言うんだ。金も家も何一つ不自由をさせてないだろ！

母 ええ、ええ、お金も家もありますよ。お陰様でね。ないのは夫と幸せだけよ！
父 何？
ナレーション 聞いてしまった。父と母のののしり合い。ショックだ。部屋に戻ってもなかなか寝つけない。暗い気持ちで朝を迎えた――。

多美子 おはよう、お母さん。
母 おはよ。
ナレーション お母さんの目、赤い。泣いたんだ。眠れなかったんだ、やっば。
母 守、ほら、早くしなさい。学校遅れるでしょ。
多美子 ねえ、お父さんは？
母 知りませんよ。守、どうして時間割を今ごろやるの！ そんなことじゃダメだって前から言ってるでしょ。男のくせに泣くんじゃありません。(FO)

ナレーション 今朝のお母さんはいつもより怖い。特に弟の守につらく当たるのは、お父さんのせいなんだろうけど…。

(効果音) (始業のチャイム)(ガヤ)

麻莉子 そうねえ。やっぱりあの中性っぽさがいいのよね、上月君。
女子 そうお？ 田舎っぽいけど、あの素朴さも捨て難いわよ、大地君とか。(笑い)
麻莉子 多美子、おはよ！ 多美子はどっちタイプ？
女子 あら、多美子は上月君よね。かわゆくて弱そうで、守ってあげたいほうだもんね。

多美子 …今、そんな気になれないよ。
麻莉子 ん？ どうしたの？ 浮かない顔して。
多美子 別に。それどころじゃないの。
女子 ふーん…。

多美子モノローグ 男の子選びも、宮坂大地君が加わって変わってきたけど、でも、みんな自分の外見上の好みで勝手なこと言ってる。男と女の世界って、そんなカッコいいもんじゃない。人間、内側は何を考えてるのか分かりやしないんだ。

ナレーション その晩も、父と母のののしり合いは続いた。
母 少しは家のことも考えてよ。多美子も年ごろだし、守も今年は中学受験なんだから。あなた、父親らしいことなんて、一つもしてないじゃない。

父 不自由なく食わせてるだろ。それが父親の甲斐性^{かひせい}ってもんだ。だれのために夜遅くまで働いてると思ってんだ。家族のためだろ。

母 家族？ この家はずっと母子家庭ですよ。わたしが、このわたしが母であり父親の役をやってきたんです！

父 そうか。それならお前のパート勤めはどうなんだ？ 子供が学校から帰ってきても、まだ家を空けてるじゃないか。おれが「よせ」と言ってもお前は聞かなかった。稼いで離婚の準備でもするつもりなのか？ 女も強くなったもんだ。

母 何ですって？

ナレーション 聞きたくない！ 耳をふさいでも、ワンワンとののしり合いの言葉が響いてくるようだ。どうして？ やめてよ、お父さん、お母さん。お願い、やめてー！

 泣きながら朝を迎えた。今日は日曜日だ――。

母 おはよう、多美子。今朝は早いのね。

多美子 おはよう。お父さんは？

母 ゴルフよ。全く勝手なんだから。わたしのパート勤めを何と言ったと思う？ お父さんへの当てつけだとか、女も強くなったもんだとか。全く、強くもなるわよ。そうできなきゃ生きていけないわよ、今の時代は。

多美子 パートやめたら？

母 何言うの？ そりゃ、お金に困ってるわけじゃないけど、お金には換えられないもの。うん、自分で稼いだっていう満足感かしら。それがあからね、ポケーっと家にいるより、息抜きにもなるし、とてもやめられないわ。

多美子 お父さんがやめろと言っても？

母 構わないわよ。迷惑かけてるわけじゃないし。わたしはわたしよ。あ、ちょっと多美子、どこ行くの？

(効果音) (ドアをバタンと閉める音)

(効果音) (街の雑踏)

ナレーション 分かっちゃった。お父さんも仕事仕事で家から逃げてて勝手だけど、お母さんもそうなんだ。結局、自分のことしか考えてない。そうなんだ、分かったよ。

多美子 (人とぶつかる)あ、イタ！ ごめんなさい。

大地 おっと。大丈夫ですか？ あれ、中村じゃない。

多美子 あら、宮坂君。

大地 どうしたの、こんなところで？ 下向いて歩いているからコンタクトレンズでも落としたのかと思ったよ。

多美子 (無言)

大地 ん、あれ？ 何？ どうしたの？

多美子 (涙声)う、う、内の両親、離婚するかもしれない。

大地 離婚？ 穏やかじゃないな。ちょっと落ち着いて。どうしたんだよ、一体？

ナレーション どうして涙が出てきちゃったのか。宮坂君に会った途端、涙が込みあげてきて止まらなかった。公園のベンチに座って、父と母のこと聞いてもらっちゃった。彼がクリスチャンだからっていう、なんとなく心を許せる気持ちが手伝ってたんだ。

大地 ふーん、そうだったのか。悲しいよな、家の中でそういうことがあると。おれだっ

たら、そんな時、神様に祈るなあ。

多美子 祈る？ 神様に？

大地 うん。神様は、真剣に信じて祈ることにこたえてくださるよ。あ、そうだ。ちょうどいい、行こう。

多美子 え、どこに？

大地 教会さ。行ってみよ。

多美子 う、うん。

ナレーション 考える間もなく、宮坂君に腕を引かれて、教会の門をくぐった。なんて強引なんだろう。でも、それでもいいやと思った。生まれて初めての教会。でも、想像していたよりも、家庭的な雰囲気だった。

高野牧師 やあ、いらっしやい。さあ、どうぞ。牧師の高野です。

多美子 はい。あの、わたし、宮坂君のクラスメートの中村多美子です。

大地 中村、牧師先生にさっきのこと話してもいいかな。

多美子 うん。

ナレーション 教会堂の中で、牧師先生と3人でお話した。牧師先生って、もっとお年寄りで、まじめくさった人かと思ってたら、そうでもない。お父さんと同じくらいの年齢かな。宮坂君が通っている教会ってこともあって、いつしかわたしは、ずっと前からの知り合いみたいに打ち解けていた。

高野牧師 中村さんのお母さんは、娘の手前、恥ずかしくて言えなかったのかもしれないけど、寂しかったんじゃないかな。

大地 あ、それ知ってる。「寂しい女は太る」って本があったね。

高野牧師 あかね、宮坂君。太る話じゃないの、今は。

多美子 寂しい？ うん、そっか…。そうですね。母は寂しかったのかもしれない。父のいない時間が多くて。

高野牧師 昔は、男は外で仕事をし、家を守るのは女の役目って時代だったから、女の強さにも芯が通ってたけど、今は仕事も家事も男女平等にやって当然。妻が夫の助け手であるとは考えないで、むしろ、妻が夫に助けられたいと考えているんじゃないかな。

大地 うーん。男としては、それはつらい。

高野牧師 まあ、中村さんの言うように、お母さんは、お金じゃなくて満足感とか、自分を必要としてくれるところを求めたんだろうね。寂しさが女性を強くしたとも言えるし、逆に、仕事にお父さんを取られてしまった女性パワーの行き所が、一方では家庭の電化や子供の数の減少などで、十分な時間ができたこともあって、家庭から出て、社会で発揮されるってことにもなるんだろうね。

大地 それじゃ子供が犠牲者だ。

多美子 あ、それ言ってる。弟なんか、男のくせにとか、何かと言われて小さくなってるも

ん。

大地 そう。だから男が弱くなるんだ。そうして女はますます強くなる。

多美子 うん。…もう、宮坂君たら！

高野牧師 そうだね。悪循環だね。仕事に取られるお父さんってのは、日本の社会の構造の問題だからね。経済成長ばかりを追う体質。物が豊かになれば、人間は幸福になれるという誤った幻想が、男性を、そう、何百万という中村さんのお父さんたちを、会社に縛り付け、家族から奪ってしまった。その結果、男は、家庭で、真の父親としての役割、まさに神様の創造の秩序である”治める者”としての、正しい意味での権威を失ってしまった。これじゃたまらないとばかり、女性は強くなる。家庭内だけじゃなく、そのパワーはどんどん社会に進出する。やっぱりこれは、残念ながら男の責任だね。

大地 だけど先生、聖書には“男は女のかしら”ってあるんでしょ？

高野牧師 ああ、そうだよ。だけど本当にそうありたいと思ったら、女の人にそう認めてもらいたかったら、それなりの責任を果たさなきゃ。

多美子 …先生、うちの父と母、大丈夫でしょうか？

高野牧師 大丈夫だよ、中村さん。実はあなたのお母さんは、若いころ、この教会に通ってたんだ。バリバリやり手だったけど、“女は男の助け手”っていう聖書の原則は、ちゃんと教えたつもりだし、根は本当に優しい方だから、ちゃんと心では分かてると思うよ。結婚後はしばらくごぶさただが、一度、お2人で教会に来るよう、誘ってみるから。

多美子 ほんとですか？

ナレーション わたしはホッとした。そして、まだ小さかったわたしたちきょうだい姉弟を中に、父と母が仲良く語り合っていた我が家を思い出していた。

多美子モノローグ あの日が、あの喜びが、必ず戻ってきますよね、神様？

ナレーション わたしは、心の中でつぶやいていた――。

<完>